

## 延慶本平家物語における伝承とその受容

—— 第五本六 梶原与佐々木馬所望事、七 兵衛佐ノ軍兵等 付宇治瀬田事の場合 ——

The Folklore and Its Acceptance in Heike Monogatari Copied in Enkyo Era

— About Kajiwara and Sasaki's Desires to Possess a Horse in the Sixth Story in the First Book of Volume 5;  
On the Soldier of Hyonoske, or on the Uji and Seto in the Seventh Story of the Same Volume —

砂川 博

### 1 はじめに

本稿もまた、延慶本平家物語第五本六 梶原与佐々木馬所望事、同七 兵衛佐ノ軍兵等付宇治瀬田事を組上とした平家物語における伝承とその受容という問題についての試論である。

初めに梶原与佐々木馬所望事の記事構成を検討することで、延慶本作者がかなり念入りの編集・著述を行った事実を確かめておこう。まず本章段の記事の概要を示すと、

- ① 義仲追討軍、由井ガ浜に勢揃え。
- ② 梶原景季、頼朝に馬を所望、うすずみを得る。
- ③ 平山季重、上総介に馬を所望、目槽毛を得る。
- ④ 源範頼は足柄に、源義経は箱根に取り掛かり、義経は箱根権現に詣で、所願成就を祈る。

⑤ 佐々木高綱、頼朝より生食を拝領する。

⑥ 梶原、佐々木、生食をめぐって応酬。

一通り目を通すと、あたかも所与の「説話」をただべたと貼り付けたようにも思われるが、子細に見ると必ずしもそうとはかりは言えないところがある。延慶本の作者は、それぞれの話柄を物語の組上に載せるに際して、前後の脈絡を緊密にすることにまず気を配ったらしい。

①から②への展開を見ると、

去十日、木曾冠者義仲ヲ追討ノ為ニ可キ上洛ニ東国ノ臥士、若宮権現ノ鳥居ノ前、由伊ノ浜ニテ勢ゾロヘアリ。  
其中ニ梶原源太景季、鎌倉殿ニ参テ申ケルハ、

とあり、「其中ニ」ということばを用いて、大勢の東国武士の中から梶原だけをやんわりと抜き出す。

余りにささやかであり、ありふれたことばなので、殊更延慶本作者の気配りを云々するには根拠薄弱だとの意見もあろうが、②から③への展開を見れば、これがまんざら深読みではないことがわからう。

(梶原) ウスミミヲ給テ罷出ニケリ。其後兵共面々ニ参テ暇申ケル中ニ、平山武者所季重見参ニ入テ罷出ケル処  
ニ、西御門ニテ上総介ニ行相タリ。

ここでも延慶本作者は、大勢の武士が頼朝に暇乞いをしたことを述べて、同じく「其」「中」の一人として平山に言及するという格好にしている。

しかしこれでもまだ念入りの編集・著述と言うには材料が不足していると見る向きもあろうから、次の③から④への展開を見よう。④の書き出しは、

今度ノ上洛ノ大将二人ノ内、一人ハ蒲御曹司範頼、一人ハ九郎御曹司義経也。蒲御曹司ハ足柄ニカ、リ、九郎御曹司ハ箱根ニゾカ、リ給ケル。

とあり、一転して、ここでは二人の大將軍範頼と義経の動静に及ぶ。しかし、これは作為とは言えず、ある意味では当然の処置と言ふべきだとする意見もあるかも知れない。すなわち、このように由井ガ浜を出発した東国武士の様子を述べ来たならば、享受者は彼らを率いる肝腎の大將軍の動静や如何にという疑問を抱くはずで、そうした問いに対して答えただけであると。

しかし、④の記事がこの位置に据え置かれたのは、あながちそのことが理由ではなかったようだ。すなわち⑤の冒頭に、

佐々木四郎隆綱、鎌倉殿ニ参タリ。「イカニ今マデ遅カリツルゾ」と宣へバ、

とあって、頼朝のことばを通じて高綱が由井ガ浜での勢揃いに大幅に遅参したことが明らかにされているからだ。

私見によれば、これと④の記事とは不可分に結び合っている。もしここで仮に、②梶原の馬所望譚↓③平山の馬所望譚↓⑤佐々木の馬所望譚というふうに繋ぐと、頼朝の「イカニ今マデ遅カリツルゾ」ということばが宙に浮いてしまふことになるからだ。佐々木が梶原、或いは平山や外の武者達に遅れて見参したとしても、たかが知れている。それ程に時間を要したわけではなく、したがって「イカニ今マデ遅カリツルゾ」という頼朝のことばを誘発することはあり得ない。しかし②③に続いて④で範頼が足柄に、同じく義経が箱根まで至り、所願成就を祈ったとなれば、話は全く違ってくる。そこでは範頼と義経がそれぞれが鎌倉を発して足柄、箱根までに至る時間が経過しているわけで、それは短い時間ではない。ちなみに、高綱は「一夜半日」を駆けて駿河浮島原でようやく追いついているから、おおよそ一日の遅参があったと判断できる。

このように見てくると、ここで頼朝が佐々木高綱に向かって開口一番、「イカニ今マデ遅カリツルゾ」と尋ねても少しもおかしくはなく、それなりにじゅうぶん辻褃は合っているのである。④で、いったん範頼や義経を足柄、箱根まで赴かした後、反転して鎌倉における⑤の佐々木の馬所望譚に筆を戻したのは、頼朝の「イカニ今マデ遅カリツ

ルゾ」ということは読み手に無理なく理解させるためであり、巧みな時間処理と言わねばならない。作者はその辺りの機微をじゅうぶんに弁えていたのであり、わたくしが殊更延慶本の作者が編集・著述に意を尽くしたと言う所以でもある。

2 梶原・平山・佐々木の名馬所望・拝領譚の構成

梶原	平山	佐々木
<p>1 梶原、頼朝に生飡を所望し、宇治川先陣を果たさんと言上す。</p> <p>2 頼朝これに不快を感じ、うすずみを与う。</p> <p>3 うすずみの名の由来</p> <p>4 うすずみを得るも、梶原、落胆す。</p> <p>5 梶原に対する作者の評言。</p> <p>6 梶原、不本意ながら退出。</p>	<p>1 平山、頼朝に見参の後、上総介に出会い、目槽毛を所望。</p> <p>2 上総介、平山の言に感じ目槽毛を与う。</p> <p>2 平山、喜び、下部をして馬を取らしむ。</p> <p>3 目槽毛の名の由来</p> <p>4 平山、上総介の恩を喜び、諺を引いて若党に訓示す。</p>	<p>1 佐々木、頼朝に見参。</p> <p>○頼朝、遅参の理由を質す。</p> <p>○佐々木、亡父の供養のため遅参と説明</p> <p>2 頼朝、落涙。佐々木に生飡を与えんとするも、梶原の存念を気遣う。</p> <p>2 佐々木、頼朝の配慮を謝し、生飡を得る。</p> <p>3 生飡の名の由来。</p> <p>4 生飡を得、佐々木喜ぶ。</p> <p>5 作者の評言。</p> <p>6 佐々木、駿河浮島原へ。</p>

右に掲げたのは、梶原・平山・佐々木がそれぞれ頼朝、上総介から馬を賜った記事（前掲②③⑤）の摘要である。

表の見方について言うと、アラビア数字のものは同趣の記事と判定できるもの、またダッシュがついているものもそれに準ずる記事と判定した。○は独自記事である。

そこで改めて上記三話の、話の要素(仮に「話素」と称す)を見ると、それぞれ1へ馬の持ち主に見参、2へ馬を得る、3へ馬の名の由来、4へ馬を得た者の心情」となり、しかもその配列まで同じくすることが分かる。

共通するのは話素やその配列だけではない。いずれの記事も、諺や教訓を引き、人としての有り様を説いていることも共通する。すなわち②梶原譚の5では、頼朝の「声ヤウ兒ケシキニクヒケシタル者哉」という気色に予想外の面持ちで退出した梶原景季に対して、作者は、

天ニヨセク、マリ地ニヌキアシ(ストイフ)コトハ、此躰ノ事ナルベシ。(括弧内は脱漏か北原保雄編『延慶本平家物語

語本文篇』勉誠社、一九九〇年)

と評し、また③平山譚4でも、季重が、

ツク、世間ノ相ヲミルニ、値ヒ代リハナケレドモ、大事ノ空ヲユヅルハ父母ニ親ニシクハナシ。上総介殿ノ芳恩コソ父母ニ親ニモスグレ給ヒタレ。自今以後ハ若党共、上総介殿ニ無礼バシ仕ルナ。

と若党たちを戒めたとあり、更に⑤佐々木譚5でも、日比から「ホシケ」にしていた生飡を得ることができた高綱の喜びに付言して、

トヘカシナナサケハ人ノタメナラズウキワレトテモコ、ロヤハナキ

ト云古歌ノ風情思アハセラレテ哀也。千万ノ軍兵ノ中ニ、父方墓所ニテ暇ヲ乞、十三年ノ追善ヲ引コシテ仕ル情親ノ為トコソ思ケメドモ、天神地祇アハレミ給フユヘニ、鎌倉殿ヨリ生飡ヲ給ハリヌル事情ハ、ゲ二人ノ為ニハアラザリケリ。

と評している。

ちなみに水原一氏は、⑤佐々木譚5の条を引いて、ここに「追善供養の勧めという、在家生活の中での仏教的関心を誘う種類」の「説法語り」が認められるとしながら、「トヘカシナ」の和歌が元来『山家集』『続古今集』所載の恋歌であり、「この説法語りの中に引くには余りにそぐわぬ」こと、したがって「この比喩は物語の必然ではなく、気まぐれに、ある特殊の立場から持ち込まれたものと思われる」（『延慶本平家物語論考』三七七頁〜三七八頁、加藤中道館、一九七九年）と解している。

水原氏の見解の中で、上記の記述に「説法語り」の色合いを認め、和歌が「比喩」として引かれているとするのは妥当な見解であろうが（後述）、この和歌が「気まぐれに」「持ち込まれた」とするのはどうであろうか。ここでは「トヘカシナ」の和歌は、「ゲニ人ノ為ニハアラザリケリ」という文言と響き合うことで恋歌としての面目を一新していると判断すべきではなからうか。つまり、元は恋歌であっても、ここでは文字通り「情けは人のためならず」という処世訓を示すものとして、水原氏のことばを借用すれば「比喩」として機能しているのではないか。「古歌」として引かれていることもそれを傍証するはずである。いずれにしても、これは延慶本の垂訓癖を物語るもので（拙稿「延慶本平家物語の性格——巻末記事を中心に——」『平家物語新考』東京美術、一九八二年）、単なる「気まぐれ」とは思われない。

更に、いままで述べてきたことと重複することだが、三つの記事の中で、二者にそれぞれ共通する要素のあることも見逃せない。その一つは、梶原と佐々木両譚のそれぞれに作者の評言が付せられていること（共に5）、その二つは、早くに水原一氏の指摘した「説法語り」、すなわち唱導的表現が平山譚と佐々木譚に散見することである（前掲書、三七七頁、三八一頁）。

このように、梶原・平山・佐々木譚において、(一)三話共に名馬所望・拝領譚として話素やその配列を等しくし、(二)三話共に諺・教訓を引用して処世の術を説き、(三)梶原・佐々木の名馬所望に拘わって評言を加え、(四)平山・佐々木譚

において唱導的口調が散見するといった共通の要素をもつということは、いったい何を意味するのであろうか。これらの話がこうした多岐にわたる要素を同じくすることは、「原語り」そのままを露呈した結果と見るべきであらうか。いまのわたくしには、仮にこれらの記事の基盤に「原語り」を想定するとしても、それぞれが現存の延慶本に見るような話柄として既に完結していたとは思われないのである。特にこの話柄の基本的な骨組みとも言うべき(一)を見ると、その感を深くする。むしろ、延慶本作者による相<sub>当</sub>加<sub>筆</sub>・潤色を想定した方が穏当ではないかと思う。

もちろん一つの想定として、延慶本に採択される以前の段階に、口頭伝承の「梶原語り」や「平山語り」、「佐々木語り」が存在し、しかもその段階で如上の要素が全て備わっていて、それらが現存のテキストに露呈している。或いは、いま一つの想定として、これらの話がそれぞれ発生の場合を異にしながらも、ある特定の集団に一括して管理され、そこで一定の潤色・彫琢を受け、現存のような物語として定着したと見ることもできよう。水原一氏が「熊谷説話の考察 六、佐々木説話」(前掲書)の中で提起された仮説や牧野和夫氏の「延慶本『平家物語』の一側面」(『藝文研究』第三十六号、一九七七年)などは後者の典型であらう。

たとえば水原一氏は、梶原譚については「梶原自身の側に立った武功譚」と「反梶原の立場からする談」があり、生澁をめぐる梶原との問答や宇治川先陣争いにおける「露骨な批判」や「露骨な語り口調」は佐々木自身のものであり、「説話の原初において働いていたもの」とし、平山説話については、「橋渡りや一二懸で熊谷と競い合う点においては熊谷説話に密接に参加し」、「名馬の物語という意味で佐々木説話とも組む」ことから、熊谷説話・佐々木説話と「連合している」とし、佐々木・熊谷・平山説話が当初「各自の武功譚」として発生、その後「一団の説法的語り物」として連絡し合い、平家物語に提供され、延慶本に「その面影が残っている」と断じている。水原氏が熊谷説話をも視野に入れた上で、梶原・佐々木・平山説話の形成について如上のような仮説を立てたのは、まずもって延慶本のそれらに唱導的口調が散見すること、熊谷直実、佐々木高綱の両者が共に遁世し、「法文を相談す」るよりも「合戦

物語」を好む（『一言芳談』）遁世者が集まった高野山と少なからぬかわりをもったことなどが挙げられる。

確かにお説のように、これら名馬所望譚と宇治川合戦譚は一続きの物語として把握すべきであるとは思う。しかし以下にも述べるが、たとえば平山譚の基盤に「武功譚」の存在を想定することが困難であるように、どんな場合でも平家物語の説話的話題に原語りを想定することができるとも限らないのも、また確かである。現存テキストの背景にあなたも一定の語りが存したかのような、言わば偽装された「説話」もあったことは認めなければならず（たとえば栃木孝惟氏「文学の方法としての語り——保元物語を対象として——」『常葉国文』第七号）、更にまた、現存するテキストの表層の部分に、どのような趣向・表現で残存しているか、つまり水原氏の言うところの「面影」をなぞることはまことに至難の業と言わねばならない。しかも素材としての「原語り」の殆どが、外の説話集や記録に残っていないため、あくまでも一つの想定、可能性に止まるのはまことに遺憾と言わねばならぬ。

「原語り」の「面影」と、物語作者によって潤色・彫琢された部分とをきちんと識別することは、いまとなっては不可能であろう。その辺りが、半ば破壊されながらも往古さながらの姿に近い形で地中に残る遺物・遺跡などの考古資料の場合と、一方、それとは分からぬ形で本文に融合してしまっている文献資料の場合と決定的に違うところもある。しかしこればかりは切歯扼腕してもどうにもならない。

そこで目下、成し得る方法としては、まずテキストの表層部分に掛けられた網目を丹念に剥がしていく以外はない。網目、すなわち作者によって仕掛けられた物語叙述の方法や、趣向、構想に基づくもの（と解されるもの。もっともこれ自体一つの仮説ではあるが）をまず剥がした上で、それに乗って来ないものを取り敢えず素材となった「原語り」ないしはその話柄の「核」として選り別けるやり方である。もとより、こうした方法にも様々な瑕瑾や陥穽のあることも重々承知しているが、外にこれに代わる客観的・科学的な方法が見つかるまでは幾つかの捨て石（仮説）を積み重ねていくしかない。



以上のことを念頭に置きながら、再度、梶原・平山・佐々木譚に戻り、これまでとは別な角度から検討を加えてみたい。

### 3 平山・梶原・佐々木譚の趣向

論述の都合上、まず③平山譚から検討する。かつて拙稿「平家物語における伝承とその受容——上総介・千葉介・江戸の参陣譚をめぐって——」（『北九州大学文学部紀要』第46号、一九九二年）で述べたように、上総介広常は寿永二年（一一八三）十二月、謀反の容疑で誅殺されている。既に亡い広常が翌年の正月の由井ガ浜での馬揃えに参加できるはずもなく、西御門での平山季重との邂逅も、また平山の目槽毛の所望もあり得ない。

もっとも、四部本（巻九 熊谷平山一二懸）や百二十句本（巻九 熊谷・平山一二の駆）では一谷の合戦の際、広常から譲られた目槽毛に乗っていたと記されているから、或いは、この馬揃え以前に、広常が平山に目槽毛を譲ったというような事実があったかも知れない。しかし、その四部本や百二十句本の記事にしたところで、延慶本のような話柄を念頭において記述された可能性も否定できないだけに、それをもって広常の目槽毛譲渡の傍証とするわけにはいかない。

以上のことから、延慶本の平山譚の形成について考えようとすれば、寿永三年正月の西御門における平山の目槽毛所望譚が事実としてあり得なかったこと、また、それ以前の広常による目槽毛譲渡の信憑性についても疑問があるということを前提にしなければならなくなる。このことを言い換えれば、本譚そのものがまるまる創作された説話、偽装された説話であった可能性が強いということでもある。もっとも、創作したのが延慶本作者なのか、延慶本に採取される前の段階で、既に現行のような物語として完成していたのが問題になるが、この点についてはいまはこれ以

上触れないでおく。

ともあれ、平山譚がまるまるの虚構であるとしたならば、この平山譚と(一)話素とその配列(二)処世訓の引用(三)評言の付加(四)唱導的口調などの趣向・表現面において共通点をもつ梶原譚や佐々木譚についても同様の可能性が高いということになるのではなからうか。その場合、梶原・佐々木が共に名馬生喰を争い、宇治川先陣を競う以上、両者の物語が別個に趣向されたとは思われず、両者を括る一つの趣向があったと見るのが穏当と言うべきであろう。

その趣向とは何か。結論から先に言うとそれは、山下宏明氏が喝破されたような「民話」の「手法」によるものと解される(「いくさ語り——実盛最後と宇治川先陣——」『語りとしての平家物語』岩波書店、一九九四年)。つまり昔話「瘤取爺」や「舌切雀」と同じ「隣の爺」型の様式を踏むものではなかったか。強欲にして悪玉の人間は失敗し、無欲にして善玉の人間は成功するという単純な構図である。

すなわち馬揃えの後、頼朝に見参した梶原は「ツヨキ馬ハ多ク持」ってるが、「河ヲコキオヨ」ぐことにかけては生喰に優るものはないとし、それに乗って宇治川先陣を果たし「高名ヲ後代ニ伝ヘ」んと「高ラカニ言上シ」た。こうした梶原の如何にも傲慢な物言いや態度に、頼朝は「ニクヒケシタル者ノ声ヤウケシキ哉」と不快感を隠さず、生喰の代わりに「第二ノ御馬ウスミ」を与える。梶原は頼朝から「声ヤウケシキニクヒケシタル者哉」と思われたことを「案タガヒテ」ししぶしぶ退出したが、駿河浮島原で、佐々木が生喰を引くのを見るや、たちまち「身ヨリ猛火ヲ燃」やし「弓矢取ノ習ハ、必シモ親ノ敵、宿世ノ敵ヲノミ敵ト云カ。当座ノ恥コソ親ノ敵ニモマサリタレ。コレ程主ニニクマレ奉タル景季ガ命イキテハナニカハスベキ。口惜事シ給ツル鎌倉殿哉」と、頼朝の仕打ちに憤り、佐々木を殺し生喰を奪おうとする。しかし「御厩ノ小平次ニ酒ヲノマセ」、その隙に生喰を盗んだという佐々木の説明にころりとだまされてしまう。のみならず、宇治川の先陣争いでも佐々木にことば巧みにすかさず、遅れを取ってしまう。そして当の梶原については「大悪心ノ腹悪」なる者として「諸人ニクマレ」ていたと延慶本は説明する。以上、梶原

の言動を見ればわかるように、一連の梶原譚は分不相応な望みを抱いた、強欲な悪人の失敗譚という体裁をもつことは明らかだ。

一方、佐々木高綱のそれは善玉の成功譚としての体裁をもつ。すなわち佐々木は、出陣に先立って帰郷再び叶わぬものと覚悟し、亡父の墓所で十三年の追善供養を「引コシ」たことで、馬揃えに大幅に遅れてしまう。ところが頼朝から「合戦ノ庭ニテ身命ヲスツベキ趣キスデニ顯レテ、神妙ニコソ覚ユレ」と褒められ、思いがけず「日比ホシゲニ」していた生漕を与えられることになる。ここには梶原が「大悪心ノ腹悪」とされたように佐々木が善人だと正面きって語られてはいない。しかし、たとえば「親ノ孝養」のために十三年の追善供養を「引コシ」た、この供養にかかわって「無常ヲ観ジ」「争カ今一度ミモマヒラセ候ハデハ候ベキ」と主に対面しようと思つて参上したこと、これに對して頼朝が「御目ニ涙ヲウ」かべ「神妙」と称え、生漕を与えたことなどから、佐々木が梶原とは正反對の、極め付けの善人として語られていることは明瞭である。衷心から親に孝養を尽くし主に忠節を尽くす佐々木は武者の鑑として、言わば善玉として語られている。のみならず、佐々木が生漕を「日比ホシゲニ思」っていたにもかかわらず、この場で自ら望まず、代わりに頼朝の方が佐々木の気持ちに忖度し、与えたことになっていることにも注意したい。こうした佐々木の姿には梶原のような分不相応な望みを抱く人間ではなく、いずれかと言えは無欲な人物という像が強い。佐々木譚が無欲な善人の成功譚としての色彩をもつこと明らかだ。わたくしが梶原・佐々木の名馬生漕をめぐる一連の物語を、昔話「舌切雀」や「瘤取爺」などに象徴される「隣の爺」型に類した物語としての体裁をもつと云う所以である。

以上ここまで、生漕をめぐる話から梶原・佐々木が宇治川の先陣を争う話までを射程に入れて論じてきたが、問題は、これらが一篇の物語として口頭伝承の世界で形成され、それをそのまま延慶本が採択したと見るべきかどうかである。一連の梶原・佐々木譚が昔話「隣の爺」型の類型にしたがうだけに、それが口頭伝承の世界をかくくって生

み出されてきた可能性は高くなる（なお、軍記物語が先行説話を一つの「話型」として受容しているケースのあることは、佐伯真一氏の「軍記物語と説話」に指摘されている（説話の講座第六巻『説話とその周縁——物語・芸能——』勉誠社、一九九三年）。

しかしながら、『宇治拾遺物語』所載の「瘤取爺」にしたところで、一部に「口語的な型」を見いだすことができ、「口承文芸を基盤にしていることは疑う余地がな」いものの、同時に「翁の心中」の「掘り下げ」に見られるような「書記化されなければありえない描写」もあって、『宇治拾遺物語』が仮に民間伝承に材をあおいだにしても、すでにそこには単純な比較を許さないほどのへだたりがあり、「書かれた語りの一つの帰着をみることができる」という指摘が、既に小峯和明氏によって成されている（『宇治拾遺物語と昔話』説話伝承学会編『説話と思想・社会』桜楓社、一九八七年）ことも考慮しなければなるまい。延慶本の生食をめぐる梶原・佐々木譚と宇治川先陣譚を見る限り、同じことばの繰り返しや、登場人物の言動を繰り返し明示するような、いわゆる「口語り」の痕跡を偲ばせるような記述はなく、逆に頼朝や梶原、佐々木の存念・心中が詳しく物語られていることから見ても、生のままの語りがそのまま露呈しているというよりも、小峯和明氏のことばをそのまま借りるならば、それは「書記化」された物語と云うべきであろう。

この点に関してたとえば山下宏明氏は、「生食をめぐる兩人（梶原と佐々木―砂川注）の対比から、佐々木の先陣決意、その実行のためのかけ引きを描く点」で語り本と延慶本とが「構成を同じくする」こと、「この構成の由来を考える上で、延慶本が頼朝の存在を大きくしていること、それゆえに梶原を笑うべきピエロ役に仕立てることで佐々木像をクローズアップしていることが確認できよう。この構成が語り本に見られることから、延慶本が語りと無関係ではなかったことが明らかであるが、それは一方で意図された編成による所産であることを見逃せない」（前掲「いくさ語り——実盛最後と宇治川先陣……」）と述べておられる。

山下氏の所説のうち、私に付した傍点部の「語り」が琵琶法師の「語り」を指すのか、それとも、延慶本に採取さ

れる以前の段階の口頭伝承としての仮称「宇治川先陣譚」を指すのか、そのあたりは些か不分明だが、この後、四部本と延慶本などの「成り立ち」の「根底に、語りと、それを文字に固定して編成するという、テクスト乃至物語構成上の違いのあることを見るべきである。こうしたところに王朝の女流物語や近代小説とは違った、語りによる多様な諸本を生み出していった『平家物語』の実態がある。語りを文字化することにより視野を拡大していったいくさ物語があるだろう」という指摘からすれば、ここでの「語り」とはいわゆる口頭伝承としての「いくさ語り」の謂と思われる。このように山下宏明氏もまた延慶本の基盤に「いくさ語り」を想定し、その一方で作者による「意図された編成」を認めておられるわけだが、問題はそれを現存本文の記述の上にもどう見極めていくかであろう。そのところをはっきりさせない限り、いつまでたっても延慶本本文の形成の秘鑰は解けないのではなからうか。

ところで、前述のように佐々木・熊谷・平山の武功談に発した説話が「一団の説法的語り物として連絡し合い」その「面影」が延慶本に残存するとした水原一氏は、たとえば梶原に対する頼朝の「ニクヒケシタル者ノ声ヤウケシキ哉」という反感や、生漕を拝領した佐々木に対する梶原の「梶原ト申ハ大悪心ノ腹悪也。死生不知ノ切通ニテ侍ケルアヒダ、生漕ト云ツルヨリシテ、身ヨリ猛火ヲ燃ケル」憤激や、梶原が「諸人ニニクマレ」ていたことについての地の文での言及、或いは、自身が所望した生漕を何故入手したのか、遺恨の次第なりと迫る梶原に、佐々木が「ニクヒ梶原ガ言カナ。何ナル子細ニテモアレ、ソレニ綺ベカラズ。子息兄弟所従眷属バシニ物ヲ云様ニ、放逸ナル者ノ、言ヤウカナ。シヤ喉ブエ射貫テ、只一矢ニ射落サバヤ」と思ったことなど、梶原に対する「露骨な批判」や「極端な憎しみ」が佐々木高綱「その人のもの」と見る。水原氏は、佐々木の反梶原の感情がそのまま頼朝の心内語や地の文に反映、ないしは移行したものと判定されているが、このような推断が妥当かどうか、まことに難しい。

水原氏の場合、反梶原感情に彩られた「佐々木語り」がまずあったという仮説が前提となっているから、それなりの整合性をもつわけだが、その仮説に異議を唱える者にとっては都合の良い理屈に見えるかも知れない。しかしこれ

は自戒と反省の念を込めて言うのだが、「佐々木語り」に包摂してしまえば、何もかも片付くわけではなく、むしろこの場合、上に見たような頼朝や佐々木の心内語や心中描写の存在は、「書記化」された物語としての性格を表している<sup>1)</sup>と見る観点も考慮に入れなければなるまい。

わたくしが、生澁をめぐる梶原と佐々木の物語が口頭伝承をそのまま露呈したものとせず、延慶本作者による趣向・構想と判じたいとする傍証はまだ外にもある。

その第一は、名馬生食をめぐる佐々木や頼朝の、梶原に対する露骨な反感・罵倒が高綱や盛綱らの「梶原観をそのまま反映した」(水原一氏)ものというよりも、むしろ延慶本作者によって仮託されたものと考えられることである。私見によれば、こうした梶原への反感は、平山の目槽毛所望譚における上総介称赞と合わせて考察すべき問題である。

わたくしは、旧稿「平家物語における伝承とその受容——上総介・千葉介・江戸の参陣譚をめぐる——」(前掲)の中で、ともあれ、ここではこの話が広常の寛闊な人柄を伝える〈美談〉仕立てになっていることに注意をしておきたい。先の広常参陣譚の場合もそうであったが、平家物語は広常に対して好意的な気分というものを持ち続けていたよう<sup>2)</sup>うだ。こういう気分があったからこそ、上にみたとき上総介広常の参陣譚に対する加筆・彫琢があり得たように思われる。平家物語が『吾妻鏡』や源平闘諍録(巻五、八 上総介与頼朝中違事)などと異なり、広常の傲岸な風貌を彫り上げることに然程に熱心ではなかったことも、そうした気分の表れであろう。

と述べた。由井ガ浜馬揃えの一カ月前に誅殺された上総介広常をしてこの場に参加せしめ、平山季重をして「上総介殿ノ芳恩コソ父母ニ親ニモスグレ給ヒタレ。自今以後ハ若党共、上総殿ニ無礼バシ仕ルナ」と言わしめた理由は何か。それは、延慶本作者の上総介広常に対する雪冤と鎮魂の思いではなかったかと思う。

『吾妻鏡』寿永三年正月八日条には、頼朝が、広常が上総一宮に奉納した「甲一領」を召覧しようとしたこと、同じく正月十七日条には、「甲」添付の「願書」の趣旨が「前兵衛佐殿下の心中祈願成就」、「東国泰平」を祈ることに

あつたと知り、今更ながらに「誅罰を加へ」たことを「後悔」、「没後の追福を廻ら」し「囚人」となっていた広常の二人の弟を許したと記されている。こうした寿永三年正月の頼朝を中心とした幕府内部に揺曳していたと目される広常「追福」は鎮魂の思いに繋がる感情を、平山季重の目糴毛所望譚に見ることはできないであろうか。すなわち広常は自分の「命ニカヘテ思」い、「親ニモ子ニモ主君ニモ、手ヲ放ツベシトハ思ハ」ぬ程に秘藏していた目糴毛を平山に与えたのだが、その理由の一つは平山が門出に先立って「合戦ノ道ニ罷出習ハ再帰ルベキニアラズ。只今コソ最後ト存シ候ヘバ、心中ノ妄念ヲ懺悔シ候」と「所望」したことが、二つには平山を「鎌倉殿侍大將軍ニ思食シ」てのことだった。このうち、後者には間接的ながら広常の頼朝に対する忠誠心が垣間顔を覗かせていると言ふべきで、物語は寛闊なだけの広常像のみに光を当てたわけではないのである。いずれにしても、語るところは虚構ではあるが、逆にそうまでして上総介広常をこの場に登場させ、その人柄を大写しにしたところに物語作者の立場が滲み出ていると判ずべきであろう。

またいま一つの傍証は、佐々木譚のうちにも求めることができる。たとえば、佐々木高綱が名馬生浪を拝領することができたのは、この度の「合戦ノ庭ニテ身命ヲスツベキ」決意のもと、父秀義の追善供養を執行し、併せて「無常ヲ観シ候ナガラ、争力今一度ミマヒラセ、ミハモマヒラセ候ハデハ候ベキ」と遅ればせながらも伺候したことに、頼朝が「神妙」に思ったがためであった。馬揃えの刻限に遅れながらも、その心映えが頼朝をして「目ニ涙ヲウケサセ」、生浪を与えせしめたというわけだが、遅参といい、頼朝の芳情といい、どこかで聞いたような話柄ではなからうか。ここで即座に思い起こすのは、彼の山木判官兼隆夜襲事件である。実はあの折にも、佐々木兄弟は「大雨大水」に煩わされ、決行予定日に一日遅れ、頼朝をやきもきさせていた。しかし、彼ら兄弟が打ち揃って現れるや、頼朝は「ヨニウレシゲ」な態度で迎えた上、遅参の理由を知ると「アワレ遺恨ノ事カナ。サラバ各ヤスミ給へ」と、その労を厚くねぎらっている（第二末十 屋敷判官兼隆ノ夜討ニスル事）。

遅参しながらも、頼朝をそれを咎めることなく芳情を示したというモチーフが、山木兼隆夜襲前夜の物語にも共通するということは単なる偶然の一致と見るべきであろうか。これは一つの物語の虚構と言うべきではなからうか。と言うのは外でもない。佐々木高綱遅参の理由が亡父の墓参のせいだされているが、この時期、父の秀義は死んではいなかった。秀義が伊賀の平信兼との戦で戦死を遂げたのは、外ならぬ宇治川先陣争いから半年後の元暦元年（四月十六日改元・一一八四年）八月二日（『吾妻鏡』）のことである。したがって「亡」父秀義の十三回忌も併せて行ったために由比浜での馬揃えに遅れたという高綱の言い訳は成立せず、延慶本作者による虚構の物語ということにならざるを得ない。

ついでに言えば、この馬揃え自体が『吾妻鏡』には記されず、事実かどうか確かめられない。のみならず延慶本は、元暦元年正月十日の進発、二十日の宇治川合戦を言い、鎌倉から宇治までちょうど十一日かかったとするが、これも不審である。元暦元年八月八日の午の刻、三河守源範頼は平家追討使として北条義時ら一千騎を率いて鎌倉を出立したが、京都に到着したのは八月二十七日のこと、ちょうど二十日かかっている（『吾妻鏡』元暦元年八月八日条、九月十二日条）。また、文治元年十月九日に義経誅伐のために土佐房昌春が京へ派遣されたが、そのときの予定の行程は九日であった（『吾妻鏡』）。昌春が率いたのは、僅かに八十三騎であるから、九日でじゅうぶんとされたのであろうが、六万もの大軍が僅か十一日で宇治まで到達できたはずはない。一千騎を率いた範頼の場合でさえ、二十日を要しているのである。

ちなみに、『吾妻鏡』は平維盛を総大将とする征討軍を迎撃するために、北条時政や武田信義などが駿河に向かったことや、同じく頼朝が駿河に進発したことについてはきちんと触れ（治承四年十月十三日、十四日、十六日）、また範頼が「平家追討使として西海に赴」いたことについても「扈従の輩」の名を挙げて詳しく述べているが（元暦元年八月八日条）、前述のようにこの馬揃えについては何ら記すところがない。あれやこれや考えると、延慶本の言うよう



な馬揃えの事実がなかったことを示唆するものかも知れず、したがって平山の目糢毛所望譚は言うには及ばず、梶原の生食所望譚、佐々木の遅参、生食拝領譚も一切合財、物語の虚構ということにならざるを得ないことになる。そうなれば当然、宇治川の先陣争いそのものも虚構ということになる。もちろん、史料や文書などの言説の有無を以て、「事実」の有無を論ずることができないのは当然である。義仲追討軍の進発・下向は寿永二年十月十九日であり（『玉葉』寿永二年十月二十八日条）、同年の記事が現存の『吾妻鏡』には全て見えぬ以上、馬揃えの有無を軽々に論ずることはできないことも重々承知してはいる。

ともあれ、このように現在のところ、馬揃えそれ自体の有無や信憑性にも種々問題、疑念の存するところであるが、佐々木譚について言えば、遅参と頼朝の芳情という趣向の点から、事実に基づくというよりも、彼の山木夜襲事件との絡みから着想されたものと解することもでき、それもまた本譚が必ずしも生の語り、に負うものではないことの傍証の一つ足り得ることを述べてみただけである。

ところで、このついでに宇治川先陣についても言っておくと、これまた大森金五郎氏以来指摘されてきたことだが（「宇治川先陣に就て」『歴史地理』一九〇三年二月、「佐々木高綱の事蹟に関する疑義」『歴史地理』一九二五年十二月）、史実とも思えぬ点があるので屋上屋を架すだけのことかも知れないが、些か付け加えておきたい。

それは、佐々木高綱の兄盛綱をめぐる頼朝の感状である。『吾妻鏡』によれば、「当時西海」にあつた盛綱が「折節乗馬なきの由、言上」したので、頼朝は「わざと雑色を立てて」「葦毛」の馬一疋を送った（元暦元年十二月二日条）。盛綱はその「馬に乗りながら藤戸の海路」を渡し、平行盛を破るという戦功を立てた（同年十二月七日条）ので、頼朝は次のような内容の「御書」を遣わしたという（同年十二月廿六日条）。

昔より河水を渡すの類ありといへども、いまだ馬をもって海浪を凌ぐの例を聞かず。盛綱が振舞、希代の勝事なりと云々。

わたくしが、宇治川における佐々木高綱と梶原景季の先陣争いに何やら懐疑的なのは、傍線を施した頼朝の発言のせいである。宇治川合戦は寿永三年正月のこと、この藤戸合戦は元暦と年号は変わったものの、同じ年の十二月のこと。もし高綱と景季の先陣争いが事実なら、「昔より河水を渡すの類あり」といった言い方をするであろうか。この年の初めの弟高綱の功名を引き合いに出して、盛綱のそれを称賛するのが普通ではないか。兄弟並べて、その功を称えれば、「昔」と「今」とは別の意味合いの対照となり、それなりに平仄は合う。しかも同じように頼朝は馬を与えているのである。のみならず、生飡は頼朝「秘蔵」の馬であった。これだけ条件が揃っていて、宇治川における高綱の功名に触れぬのは、如何にも不自然、不審である。挙兵以来、佐々木兄弟の奉公が特別であったことは既に見た通りである。頼朝が宇治川における高綱の功名に全く言及しなかったということ、それはすなわち、そのような事実など認めからなかったという極めて単純明快な結論に落ち着くのではないか。

今成元昭氏は「日蓮遺文」によって、高綱の宇治川渡河談のあったことを認めながらも、平家物語の語る程に「目ざましいものではなかった」とし、それは承久の乱の宇治川先陣談による「潤色」と喝破したが、『平家物語流伝考』二二二頁～二二三頁、風間書房、一九七一年）、わたくしも同感である。いずれにしても、なお後考を待たねばなるまいが、盛綱渡海の「御書」もまた、一連の生飡・拝領譚から宇治川先陣争いまでを史実と認定することに修正を迫る材料の一つとして付け加えておきたい。

ともあれ、再び梶原・平山・佐々木の名馬拝領譚に話を戻して、敢えてその原話についての輪郭をわたくしなりに描くならば、それらは「梶原は頼朝から、平山は上総介から、佐々木は頼朝から、それぞれ馬を得た」という程度のものであったと判じたいが、いかがであろうか。結局のところ、延慶本の語る梶原・平山・佐々木譚は概ね作者の筆になるまるまるの虚構の物語であった可能性が高いのではなからうか。

4 義経の箱根参詣・宇治川合戦、平山譚

第五本六 梶原与佐々木馬所望事と七 兵衛佐ノ軍兵等付宇治勢田事は延慶本作者によって同時に執筆・趣向されたのではないだろうか。もとよりそれは、名馬を得た梶原や平山、佐々木らの活躍の場が後者に設定されていること言い換えればその後日談として位置づけることができる故でもあるが、延慶本の場合、単にそれだけではない。義経の活躍についての筆使いからもある程度裏付けることができる。

まずもっとも注目すべきは、義経に対する呼び方である。六のうちの義経の箱根権現参詣記事(④)を見ると、

今度ノ上洛ノ大将ノ内、一人ハ蒲御曹司範頼、一人ハ九郎御曹司義経也。蒲御曹司ハ足柄ニカ、リ、九郎御曹司ハ箱根ニゾカ、リ給ケル。九郎御曹司ハ昔ヨリ箱根権現ニ参詣ノ志オハシケルアヒダ、沐浴潔斎シテ社壇入堂シ給ヘリ。兵庫鎖ノ太刀一振、別当シテ御宝前ニ捧グ。「南無帰命頂礼箱根権現、和光同塵ノ光ニクモリナク、義経方所願ヲ成就セシメ給ヘ。通夜御神楽ヲモシテマヒラセタク候ヘドモ、範頼定テ早ク打過候覽ト存候ヘバ」トテ、馬ニ鞭ヲ打給ケレバ、伊豆府ニテ蒲御曹司ニ行相給ヘリ。府ヨリハ打ツレテ、多勢ニテゾ上給ケル。

とあり、「九郎御曹司」の呼称で統一されるのみならず、その言動は尊敬語を以ていちいち記されている。この点、七の宇治川合戦の条でもほぼ同様で、

○宇治ノ手ニ八九郎冠者ヲ大將軍トシテ、相従人々……

○九郎義経ハ雲霞ノ勢ヲ聳テ、(中略)サラハトテ、伊賀国ヘメグリテ、平等院ニ押寄タリケレドモ……  
の二つを例外として、

①其時二九郎御曹司、雑色、歩行走ノ者共ヲ召寄テ、「家々ノ資財雜具一々ニ取出サセテ、河鱒ノ在家ヲ皆焼払ベ

シ。分内ヲ広シテ、二万余騎ヲ皆河鱈ニ臨マセヨ」トゾ下知シ給ケル。

② 九郎御曹司、河ノ辺近ク高矢倉ヲ作ラセテ、上リ給テ、四方ヲ下知シ給ケリ。

③ 御曹司矢倉ノ上ヨリ様々ノ事ヲ下知シ給ケレドモ、カシマシクシテ人更ニ聞ズ。

④ 其時平等院ヨリ太鼓ヲ取寄テ打セラレケレバ、二万五千余騎皆シヅマリテ、御曹司ニ目ヲ懸ザル者ハ一人モナカリケリ。

⑤ 其時九郎御曹司大音声ヲ揚テ（命令の内容を省略）、トゾ下知シ給ケル。

⑥ 九郎御曹司此ヲ御覽シテ、「ヤ、佐々木殿、ワ殿ノ郎從鹿嶋ノ与一ハ甲ノ座ノ一番ニ付ベシ。別功アラムズルゾ。其由ヲ披露シ給へ。今日ヨリ改名シテ、与一トハ云ベカラズ。日本一ト呼ベシ」トゾ宣ケル。

と一貫している。このように、地の文で義経を「御曹司」と呼び、その言動を叙するに尊敬語をもってする例は外にはなく、上記二つの記事が、同一作者によって同時に構想・趣向されたものと見ることが可能である。以上のことを前提にして、義経の箱根参詣と宇治川における戦闘指揮について検討してみたい。

上洛途上の義経が、箱根権現に詣で「所願」成就を祈るようなことがあったのかどうか、この点『吾妻鏡』に徴しても明らかではない。延慶本は義経には「昔ヨリ箱根権現ニ参詣ノ志」があったと記し、この度の参詣が不自然でも唐突でもない主張するが、殊更にこういう断りを言うところに何か作爲めいたものを感じないわけにはいかない。また「通夜御神楽ヲモシテマヒラセタク候ヘドモ、範頼定テ早ク打過候覽ト存候ヘバ」と出立したというのも、些か気になる。管見によれば、義経が範頼の動静に気遣いを見せたのはこの条だけで、これも義経を早々に出発させるために仕組まれた弁明の一つのように思われる。更に、義仲追討の途上で義経が箱根権現に立ち寄り「所願」成就を祈願したという話の運びからすると、この度の征討は箱根権現の加護に基づくものとする主張にもなるはずなのだが、宇治川合戦や粟津合戦の条でもそのことについての言及は全くない。この点も別の意味で気になるところである。結

局のところ、箱根権現参詣記事は、前述したような佐々木高綱の遅参を合理化するための「時間かせぎ」の役割にあるかのようだ。あれこれ考え合わせると、この記事が作為されたものとしての輪郭を明らかにしているように思われるのだが、いかがであろうか。

ところで虚実はともかく、この話が箱根権現への信仰を唱導する目的で箱根権現側で語られたもので、それを延慶本が採取したとの観測もあろうかと思うので、このことについても触れておきたい。

結論から先に言う、その可能性はないだろう。と言うのは外でもない。彼の石橋山合戦譚において、箱根権現別当行実とその弟永実が頼朝の救援に多大な貢献を成した(『吾妻鏡』治承四年八月二十四日、二十五日条)にもかかわらず、延慶本がその事実に関し一言半句も触れるところがないからである。したがって箱根山、或いは箱根権現の側に義経参詣の主張があり、それを延慶本が採り入れたというような仮説は成り立つまい。もしそのような仮説が成り立つなら、行実・永実兄弟の頼朝救援の事実が延慶本に見られぬことの理由が分からないからである。一方だけが採られ、他方が捨てられたとは考えにくい。箱根山側で頼朝救援譚が唱導されたことは『吾妻鏡』に照らしてまちがいないと思われるが、義経の参詣譚については疑問がある。

次に、宇治川における義経の戦闘指揮にかかわる記述の特徴を見ることで、延慶本作者が物語叙述に示した仮構の有り様を見ておこう。

指摘しておくべきことの第一は、先に掲げた①②③のうち、義経の言動を直接語らぬ④を除く全てが「九郎御曹司」「御曹司」……「下知シ給(フ)」「宣ケル」という構文をとっている事実である。義経がこの合戦の大將軍である以上、指揮官として命令を下す様子に筆が割かれるのは当然だと言えはそれだけの話だが、必ずしもそうは断じ得まい。私見によれば、このような起句と結句を同じくするという構文は、義経の言動を物語る一つの表現様式・方法として延慶本の作者によって意図的に選り取りられたものと推断できる。

その第二の特徴は、全てではないが、この主部と述部に挟まれた命令・下知内容の記述と、それによって引き起こされた出来事の記述が共に様式化された表現意識(対語、ないしは対照的発想)に基づくものとなっていることである。たとえば、①の下知は、

雑色、歩行走ノ者共ヲ召寄テ、「家々ノ資財雑具一々ニ取出サセテ、河鱸ノ在家ヲ皆焼払ベシ。分内ヲ広シテ、二万余騎ヲ河鱸ニ臨マセヨ」

とあり、傍線部と二重傍線部は対語、対照的記述と見做すことができよう。

更にこれに続く記事は、

歩行走ノ者共、家々ニ走り廻テ此由ヲ披露スル処ニ、人一人モナカリケリ。サラバトテ手々ニ統松ヲ捧テ家々ヲ焼払フ事三百余家也。馬牛ナムドヲバ取出スニ及バズ。ヤドノ二置タリケレバ、皆死ニケリ。其外モ、老タル親ノ行歩ニモ叶ハス、タ、ミノ下ニカクシ、板ノ下、壺瓶ノ底ニ有ケルモ、皆焼死ニケリ。或ハ逃隠ルベキ力モ無リケルヤサシキ女房姫君ナムドヤ、或病床ニ臥タル浅猿ケナル者、小者共ニ至マデ、利那ノ間ニ煨燼トゾナリニケル。「風吹バ木ヤスカラス」トハ、此躰ノ事ナルベシ。

とあり、傍線部と二重傍線部がそれぞれ対語・対照的記述になっている。

また⑤でも、

今此ノ二万五千余騎ノ中ニ、水練、河立、潜ノ上手共ハ其数多カルラム。カ、ル処ニテコソ群ニヌケタル高名モスレ。トクノ我ト思ワム輩ハ、物具ヲヌギ置テ、セブミヲシテ、河ノ案内ヲ心ミ給フベシ。又彼ノ岸ヲミルニ、矢ハズヲ取タル者四五百騎計アリ。セブミセム者ヲ散々ニ射ムズラムト覚ゾ。甲ノ座ニツカムト思ワム人々ハ、馬ヲバステ、橋桁ヲ渡シテ、敵ノ軍兵ヲ追散シテ、水練ノ輩ヲ思サマニ振舞セヨ。

味方の軍勢に言及した傍線部アは敵のそれに言及した二重傍線部⑤に対応し、味方の軍勢に対する下知を言う傍線部

イと二重傍線部④はその内容において一方が「セブミ」すること、他方が「橋桁ヲ渡」すことでそれぞれ対応している。以上のような理由から、義経の下知を表現するに「(九郎) 御曹司」：「下知シ給ヒケレ」という構文をもってし、その下知内容や下知によって生じた出来事を表現するに対語・対照的記述を取るという事実は、宇治川における義経の合戦指揮の記事が、生の伝承(語り)の世界をかくぐったものをそのまま採録・文字化したものと見るよりも、小峯和明氏の説く「書記言語」の世界で対語や対照を意識しながら仮構されたものであったことを示唆しているのはなからうか。もとより、合戦に先立って、宇治川の「河鱈」の民家を焼き払ったということについては、たとえばこうした戦法が古い時代からの東国武者の通例であったらしいこと(『将門記』『承久記』にも見える)、また二万五千の軍勢を静かにさせるために平等院の太鼓を打たせたということについても、いかにも合戦の実態を生々しく伝えているかのようであるが、さて二万五千の軍勢を静めるために太鼓でその用が果たされたのか疑問であり、一見それらしくはあるが、むしろそれは話の帳尻を合わせるための作為であったのではないかとの疑いを消すことができない。これらは、合戦の雰囲気を作り出すための仕掛けのようなもので、これもまた事実らしく偽装された説話と見るべき痕跡の一つではないだろうか。

本稿を結ぶに当たって、最後に平山季重の宇治橋渡橋譚についても気のついたことを述べておきたい。佐々木や梶原と同じく名馬を乗り回し先陣を競ったのではなく、宇治橋の橋桁を最初に渡った武功話として掲出されているのは、由井ガ浜の馬揃えの際の目槽毛所望譚との平仄が合わず、些か腑に落ちない感がするものの、とにかく延慶本が平山の動静に終始関心をもち続けたことだけは確かであり、その限りで本譚は馬揃え記事との脈絡を見せていると言えべきであろう。そしてそこでも

平山武者所、馬ヨリ飛テ落ルマ、二橋桁ノ上ニ飛上ル。弓杖ヲツキ、扇ヲハラノトツカヒテ申ケルハ、「二万五千騎ノ軍兵ノ中ニ橋桁渡ル先陣ハ、平山武者所季重ト申小冠者也。抑当河ノ為鉢、深淵潭々トシテ、大海ニ浮

ベルガ如シ。下流方々トシテ急々ナル事、滝水ニ似タリ。橋桁幽々トシテホソク高キ事、碧天ニ聳ク虹カトモ疑ツベシ。玄舛三蔵ノ渡給ケム葱嶺ノ石橋モ、此ニハ争カ過候ベキ。落入ム事決定也。没シテ而モ失ム事疑アルベカラズ。若猿猴、若鼠猫ナムド、サラデハ平カニ渡ルベシトハ存候ハネドモ、大將軍ノ仰ヲ背バ身命ヲ惜ニ似タリ。シカレバ、命ヲバ只今九郎御曹司ニマヒラセ候。屍ヲバ速ニ宇治河ノ淵瀬ノ浪ニ濯キ侍ベシトテ、只一人渡ル処ニ、佐々木太郎定綱、渋谷馬允重助、熊谷次郎直実、同子息小次郎直宗等、已上五人ゾツキテ渡リケリ。とあつて、傍線部と二重傍線部がそれぞれ対語・対照的叙述になっていることは明らかだ。宇治橋の狭い橋桁を渡る危険性を、かの玄舛三蔵が葱嶺の石橋を渡った故事になぞらえる語り口などは、如何にも唱導の徒の手になる加筆を思わせはするが、この渡橋譚をしも「唱導語り」の場に発生した平山物語を想定する理由足り得るのであるうか。対語や対照的記述を駆使して橋桁を渡る平山の必死の内面を穿つ手法は、むしろ小峯和明氏言うところの「書記言語」の世界の方がより相応しいと思うのだが、どうであろうか。確かに、安居院の唱導集などを見ると対句などを駆使した美文が目につくが、それは口頭で語られることを前提としながらも、まず書かれたテキストとして成立したのであり、対語・対照的記述が、即物語の成立の問題に直結するわけのものではないことは自明であろう。

(一九九五年三月二日成稿、二〇〇〇年一月十日補訂)